Ⅲ

2023

国　語

注　　意

1．試験時間は，15：20 ～ 16：10 の **50 分**です。

2．問題は 一 から 三 まであります。

3．解答用紙に，受験番号と氏名を書きなさい。

4．解答はすべて**解答用紙**に書きなさい。

5．先生の指示があるまで，問題用紙をあけてはいけません。

6．問題についての質問はうけつけません。

7．試験が終わったら，解答用紙を裏返しにしておきなさい。

一

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、作問の都合で本文に手を加えた部分があります。

「僕」（工藤康太）は高校受験に失敗してから、父親に生活を厳しく管理され、大学受験に向けて結果を求められ続ける日々を送っていた。そんな中、同じクラスの朔・伊織・恭子・勇樹と共に、「落伝」（クラス対抗駅伝だが、そのメンバーに選ばれた者は「受験に落ちる」と言われている）の選手にくじ引きで選ばれた。康太はメンバーと共にその練習に励む。しかし、父親はそれをこころよく思わなかった。

早朝、朝ご飯を食べようとダイニングに入ると、父さんがもういた。
昨日の夜は、結局、家に帰るなり父さんが寝てしまったから報告会もしていない。
もしかして、これからやるつもりなのだろうか。
「駅伝の練習に行くつもりか？」
「は、はい」
「今日から行かなくていい。受験に悪影響だ」
「そんな」
そんなの嫌だ。けれど、小さな反発の声を出すのが精一杯だった。
「ついでにバスケも辞めろ。選手でもないのにだらだらとつづけてどうする？」
「でも、僕、ず、ず、ずっとバスケ、つづけてきたし。駅伝だって、バスケだって、僕が出ないと、み、みんなに迷惑が――」
迷惑なんて、かかるのかな。自信がなくなって、言葉がX尻つぼみになる。
「みんな？　昨日の連中か。ああいう三流の連中と付き合ってると、高校だけじゃなくて大学まで三流のところに通う羽目になるぞ」
みんなが、三流？
違う！　僕は三流かもしれないけど、みんなは違う！
「①なんだその目はっ」

父さんの語気が強まる。同時に、インターホンが鳴った。父さんが舌打ちをしながらモニターに近づいていく。
「まったく誰だ、こんなに朝早くから。――はい？」
モニターの向こうから、少し離れた僕のところまで聞こえるような、大きな声がした。
『おはようございます。花岡伊織と申しますけれども』
慌ててモニターに近づく。画面には、とびきり可愛い女の子の姿が映っていた。
『康太君、いらっしゃいますか？』
「いない」
いきなり通話を切ろうとした父さんの腕を、僕は慌てて掴んで止めていた。ほとんど条件反射だった。
「何する、康太」
「伊織さん？」
『ばか康太！　なんで電話に出ないわけ？』
「ごめん、スマホを見てなくて」
「通話を切れ、康太！　父親に逆らうのか？」
僕の腕を振り払おうとする父さんを必死に止めながら、伊織さんの声に耳を傾けた。もっとも、伊織さんはものすごく声が大きかったから、外からも地声が響いていたけれど。
『②今すぐ家の外に出てきなさいよ。朝練、行くからね！』
「でも――」
『早くして！』
その命令は、父さんのどんなに恐ろしい声よりも強制力があった。
父さんの腕を振り払うとダイニングの窓に駆け寄って、門の外を見る。伊織さんが、こちらに向かって手を振っていた。
「と、父さん。ご、ごめんなさい。ぼ、僕、行きます！」
父さんは、ダイニングを出ようとする僕の腕を再び掴んで止めようとした。だけど、朝練の成果か、僕のダッシュは、伸びてきた父さんの手をぎりぎりかわしてすり抜ける。

そのまま半端に靴を履くと、鞄を摑んで後ろも振り返らずに家の外へと駆け出した。

（中略）

グラウンドに到着すると、みんながもう集合していた。朔君が、僕に向かってＡ４の紙を［　A　］振ってみせる。

「昨日はごめん。親父さん、怒らせちゃって」

「ああ、いや、全然。僕のほうこそ」

「あの後、大丈夫だった？」

恭子さんも、心配そうに僕を覗きこむ。

「え？　なに？　康太、何かあったの？」

勇樹君が、［　B　］した顔でみんなを見回した。

「いや、別に大したことじゃないんだ」

「なんだよお。俺だけのけ者かよ」

ぶつぶつと文句を言う勇樹君を無視して、朔君が僕に言った。

「康太、これ、昨日言ってた見せたいもの」

朔君が、さっき振っていた紙を手渡してくる。見ると、日付の脇に数字が羅列してあった。

「これって」

「うん。康太の完走距離とタイムの記録」

「どうして朔君がこんなものを持ってるの？」

「だって俺、康太をライバルだと思って走ってたから」

照れたように、朔君が笑った。

「ライバル？　全然走れない僕が？」

朔君は、リハビリさえなければ僕なんて問題にならないくらい速く走れるはずだ。その人が、どうして僕をライバルだなんて言うんだろう。

僕は、結果の出せない男なのに。

それに本来なら、僕はこうして朔君や伊織さんたちと話すことさえできないような奴だ。恭子さんに顔向けもできないほど努力の足りな

いやつだ。その僕を、ライバルだって？
「あのさ、それってすっげー嫌味だって気づいて言ってる？」
朔君が③じれったそうに、レポート用紙を指さす。
「確かにここ最近タイムが伸び悩んでるけど、康太は俺たちの中で一番速いんだよ。だからさ、スタート、引き受けてくれない？」
「ええ!?」
意外すぎる提案に、思わずのけぞった。
「アンカーとどっちか迷ったんだけど、康太はバスケ部だけあって足腰しっかりできてるし、安定感あるし」
「ダメだよ、僕なんて」
「そんなことないよ。康太なら安心して任せられるって」
「伊織も康太君、スタートがすごく似合うと思う」
伊織さんがやってきて、僕に向かって天使の微笑みを向ける。しかしその目には、隠しきれない凶暴さが浮かんでいた。
——ごちゃごちゃ言ってないで、とっとと引き受けなさいよ。
「伊織、見てみたいなあ。康太君がトップを独走する姿」
「うん、康太ならそれも夢じゃないと思う。それにさ、余計なことかもしれないけど、④親父さんを本番に呼んで、走ってるところを見てもらえば？」
「それ、すっごくいいアイデアだと思う」
恭子さんも頷く。
——どうして？
「どうしてみんな、僕なんかのために」
「うわ、ほんと、うっとうしい」
伊織さんが、思わず本音を漏らして、慌てて口を両手で押さえた。
「なんでって、まあ悔しいじゃん？　クラスのやつらにも、康太の親父にも、駅伝なんかって思われてるわけだしさ。みんなで楽しく走って、Y鼻、明かしてやりたい気もするし。⑤別に、たかが落伝だけどな」

朔君が、照れたように言った。

恭子さんも、伊織さんも、頷いている。

「なんだよお、みんなで何話してるわけ？　俺、もうお腹が空いて死にそうなんだけど。今日は朝ごはんが少なめだったし」

ぶつぶつと、勇樹君がこぼした。おばあさんはさっそく、ダイエットメニューをつくってくれたらしい。思わず四人で顔を見合わせて、ぷっと吹き出してしまった。

⑥このメンバーで走るんだ。そしてこの五人がつないでいくタスキを、僕が最初につけて走るんだ。

家まで心配して迎えに来てくれたり、僕を信じてスタートを任せてくれるって言ったり。これでもみんなは、三流なの？　みんなで朝練した日々はゼロなの？　父さん。

違う。絶対に、違う。

みんながそれぞれの事情を乗り越えたり、ぶつかったり、協力し合ったりして、だんだんチームになっていくんだ。そのプロセスが、結果が出なければゼロだなんて、やっぱり嘘だ。今だって、僕の胸は、みんなのお蔭でこんなにあったかいのに。このあったかさに意味がないなんて、どうしても僕には思えない。

父さんの言うように、結果は確かに大事かもしれない。だけど、プロセスには、結果だけじゃ計れない沢山のものが詰まっているんだ。

（成田名璃子『ベンチウォーマーズ』による）

問一　波線部X・Yに用いられている次の言葉の意味としてもっとも適当なものを次の中からそれぞれ選んで、記号で答えなさい。

X　尻つぼみになる

ア　限界が近くなる
イ　激しく緊張する
ウ　勢いが衰える
エ　恐怖でおののく
オ　気持ちが冷める

Y　鼻を明かす

ア　得意げにふるまう
イ　人を出し抜く
ウ　相手を軽視する
エ　正体を見破る
オ　本心を隠さない

問二　空欄A・Bに入る言葉としてもっとも適当なものを次の中からそれぞれ選んで、記号で答えなさい。

ア　きりりと　　イ　ひらひらと　　ウ　びくびくと　　エ　ゆさゆさと　　オ　きょとんと

問三　傍線部①「なんだその目はっ」とありますが、このとき康太はどのような目をしていたと考えられますか。その説明としてもっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア　父親の言葉に反論を試みたが、自分に対して自信を持てないため、その勇気が出ずにもどかしく思い助けを求める目。
イ　父親の言葉が正論であるため言い返すことができず、そんな自分に対する情けなさと悔しさの混ざった険しい目。
ウ　父親の言葉が全くの見当外れであるためあきれてしまい、何を言っても無駄な父親へのあきらめのこもった冷ややかな目。
エ　父親の言葉に何とか反発しようとする中で、許しがたい言動があり、口には出さないが納得のしきれない不満げな目。
オ　父親の言葉を噛みしめるうちに、父親の自分勝手な主張に対して不信感が募って向けた、疑惑と困惑の入り混じった目。

問四　傍線部②「今すぐ家の外に出てきなさいよ。朝練、行くからね！」とありますが、ここでの伊織の行動にはどのような意図があると考えられますか。その説明としてもっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア　インターホン越しのやりとりから父親の怒りに気付き、強い口調をとることで正面から対決しようとしている。
イ　父親を恐れて自分の意志をもたずにいる康太を情けなく思い、あきれて非難する気持ちを伝えようとしている。
ウ　康太が父親と対立しているのではないかと心配し、その状況から救い出して練習に連れて行こうとしている。
エ　いやがる康太を朝練に連れ出すことはチームのためであり、自分自身は康太に興味がないと伝えようとしている。
オ　責任感から康太を呼びには来たが、父親の厳しい性格を知っているため、自分に矛先が向かないようにしている。

問五　傍線部③「じれったそうに、レポート用紙を指さす」とありますが、このときの朔の気持ちを八十字以内で説明しなさい。

問六　傍線部④「親父さんを本番に呼んで、走ってるところを見てもらえば？」とありますが、なぜこのような提案をしたのですか。その理由としてもっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア　たくましく走る姿を父親に見せることをきっかけとして、康太の努力は決して無意味ではないのだと認めてもらうため。
イ　あえて余計な口出しをすることで、なんとか反撃しようとする康太の意思を父親にも伝え、その機会を作り出すため。
ウ　大学受験に向けた学習などしなくても、康太にはスポーツという別の面で活躍する余地があるのだと父親に示すため。
エ　忙しさを言い訳にして康太の本当の姿を見ようとしない父親を、無理にスケジュールを空けさせることで変えていくため。
オ　皆と一緒になって走る駅伝の場面ならば、周囲の協力もあって康太と父親の気持ちが一つになれるだろうと期待したため。

問七　傍線部⑤「別に、たかが落伝だけどな」とありますが、このときの朔の気持ちの説明としてもっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア　自分の発言のせいで康太によけいな責任を負わせてしまったと気付いて後悔し、取りつくろおうと必死になっている。
イ　周りの人が言う通りたいしたイベントではないのに、全力で練習している康太を見ておかしく感じ、からかっている。
ウ　落ち込む康太をはげまそうと声をかけていたが、それでも消極的な様子なので、無力感とばかばかしさを覚えている。
エ　自らの悔しさもあり康太を熱心に説得していたが、ふと自分が本心を述べていると自覚し、気恥ずかしくなっている。
オ　自分たちが誰からも期待されていない事実に、やり場のない怒りを覚え、それが皮肉な言い方に出てしまっている。

問八　傍線部⑥「このメンバーで走るんだ。そしてこの五人がつないでいくタスキを、僕が最初につけて走るんだ」とありますが、このときの康太の気持ちを六十五字以内で説明しなさい。

問九　本文の表現の説明としてもっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア　比喩表現を多用して風景や登場人物の心情を生き生きと表現し、場面のイメージをより具体的なものにしている。
イ　テンポの良い会話文により話が進行することで、登場人物それぞれの人柄や心情が読者に分かりやすくなっている。
ウ　「！」や「？」という記号により、登場人物たちの駅伝にかける強い信念やプライドがはっきりと強調されている。
エ　康太の心情のみが描かれ、それ以外は想像にゆだねられることで、その場面の視点が強く印象付けられている。
オ　互いの呼び方の違いによって、なかなか素直に接することができない仲間たちの微妙な人間関係が描かれている。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

①人間とはおせっかいな動物だとつくづく思う。相手が困ってもいないのに忠告したり、手をさしのべたりする。相手が気づいていないことをわざわざ伝え、必要以上の物を用意してあたえる。その［　X　］な行為が教育である。

人間以外の動物は、たとえ相手が自分の子どもであっても教えたり訓練したりすることはめったにない。唯一、教える行為が知られているのは猛禽類(注1)や食肉類だ。ミサゴの親鳥はせっかく捕らえた魚をわざわざ放して幼鳥に捕獲させようとする。ライオンの母親は追いつめた獲物を捕らえずに子どもに追跡させる。

でも、人間に近いサルや類人猿にこういった行動は見られない。チンパンジーでわずかに2例だけ報告されているにすぎない。母親が硬いナッツを木の枝を使って割るときに、ゆっくりとその動作をくり返して子どもに確認させたという例と、母親が道具を用いてシロアリを釣り上げていたとき、それをのぞきこんでいた子どもにわざとゆっくり動作を見せた後、釣り棒を残して立ち去ったという例である。いずれも、意図的だったかどうか、確証は難しい。

このことから、獲物を捕らえたり道具を使ったりする技術以外に、動物は教える必要がないことがわかる。人間も霊長類の一種で、もともとは植物が主食である。狩りや道具が必要になるまで、教育とは無縁だったに違いない。しかも人間以外の動物では、親子の間以外に教えるという行為は見られない。それは、何かを教えると自分が損をすることが多いからである。自分が不利益を被ってまで教えようという動機をもつのは、親以外にはありえないのだ。

ではなぜ、人間は親子でもない赤の他人が一生懸命教えようとするのだろうか。それは人間が他者のなかに自分を見ようとする気持ちや、目標をもって歩もうとする性質をもっているからだと思う。そして何よりも、動物の親子のような信頼関係を、見ず知らずの他人との間にもつくることができるからである。

動物たちは教えられなくても必要なことを学ぶ。もって生まれた能力を自分が暮らす環境に合わせて発揮していく。その指針として仲間の行動を参照することがある。でも仲間の行動をすぐにそっくり真似ることはできない。俗に②サル真似というが、実はサルに真似はできないのである。

動物たちは仲間の動作に同調する高い能力をもっている。犬がしっぽを振り、サルが毛づくろいをはじめると、すぐに仲間に伝染する。しかし、自分が経験していない新奇な行動に出合ったとき、それを真似る能力は低い。

かつて日本でサルの観察がはじまったころ、「③イモ洗い」という文化的な行動が宮崎県の幸島で報告されて話題になったことがある。4歳のメスのニホンザルが砂浜にまかれたサツマイモを波打ち際へ運び、砂を落として食べはじめた。やがて、このメスと遊び仲間の同世代の子どもたちや、血縁関係にある母親や姉妹、叔母たちが同じように海水でイモを洗いはじめた。この伝播(注2)のプロセスを調べた日本の霊長類学者は、新しく獲得された行動が遺伝によらずに仲間に伝わっていく仕組みとして、人間の文化に通じる前文化的な行動と見なした。

しかし、この行動が群れ全体に行きわたるまで4年もかかったし、おとなのオスはとうとう覚えることができなかった。人間のように、他者の行動を観察してそれをコピーしたわけではない。目的など部分的に行動を模倣できたものの、行為を完結させるためにはサルたちが自分で［Y］しながら学習したのだろうという結論にいたった。

また、チンパンジーは石を用いて硬いナッツを割る道具使用が知られているが、これも子どもたちがいくら熱心に観察しても7歳にならないと習得することができないといわれている。類人猿といえども、簡単に仲間の行為を真似ることはできないのである。

サル真似とは、考えもなしにむやみに他人の動作を真似ることだ。人間はあまりにもそれが上手なので、サルになぞらえて戒めたのだろうと思う。でもサル真似をするためには、相手の心と体に同化しなければならず、その上で動作のつながりと行為の目的を即座に理解する必要がある。そして何よりも、それをしてみたいという強い動機がなければならない。アイドルのしぐさやファッションがすぐに［Z］するのは、みんなが大きな憧れを抱くからだ。

人間の子どもがゴリラの子どもと違うのは、だれかのようになりたい、未知のことを知りたいという強い欲求をもっていることだ。その望みをかなえるには憧れの人に会うこと、その知識や経験をもつ人に聞くことが一番である。これまで子どもたちはみんなそうしておとなになった。おとなは子どもが知らない知識をもっているからこそ、子どもたちに信頼され、教育することができた。

しかし今、子どもたちは知りたいことを人から学ぶ必要がない。インターネットを開けば、そこには無限の知識と未知の世界が広がっている。人間のもつ知識はすべて情報としてアクセス可能だと子どもたちは思っている。キーワードを入れるだけで、知りたい答えがいつでも得られると考えているのだ。

④学びの方法が変われば、教え方も変わらざるを得ない。子どもたちは知識を人に求めてはいないので、知識をあたえるだけでは信頼も尊敬もしてくれない。それでも相変わらず人はおせっかいなので、無理に教えようとして嫌がられてしまう。信頼関係をつくれない教育現場ではトラブルが続出するのだ。

現代は、知識そのものではなく、実践する力や考える力を教える時代であると私は思う。過剰な情報はむしろ人々から想像する力を奪う。

人間の身体を使って何ができるか、どんな発想の展開が可能か、それを知るには人と出会い、実践の場に参加しなければならない。サル真似はむしろ学びの基本である。人と関わりをもちながら、⑤他者のなかに自分を見つける楽しさを知ってほしい。そこに新しい時代の信頼と学びの場が開かれるのではないだろうか。

（山極寿一『ゴリラからの警告「人間社会、ここがおかしい」』による）

（注１）猛禽類…大型で狩りをする種類の鳥類。ワシ・タカ・ミサゴなど。

（注２）伝播…伝わり広まること。

問一　空欄X～Zに入る言葉として適当なものを次の中からそれぞれ選んで、記号で答えなさい。

（X）ア　個人的　　イ　必然的　　ウ　科学的　　エ　本質的　　オ　典型的

（Y）ア　五里霧中　　イ　試行錯誤　　ウ　五十歩百歩　　エ　七転八倒　　オ　不言実行

（Z）ア　普及　　イ　循環　　ウ　衰退　　エ　存在　　オ　到来

問二　傍線部①「人間とはおせっかいな動物だ」とありますが、ここでの人間の「おせっかい」として不適当なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア　自分の子どもにわざと動作をくり返し見せる。

イ　自分の子どもでもないのに一生懸命教える。

ウ　自分が損をする可能性があっても教える。

エ　相手が困ってもいないのに手をさしのべる。

オ　相手に必要以上のものを用意してあたえる。

問三　傍線部②「サル真似」とありますが、これは人間にとってどのような行為だと説明されていますか。「サル真似」をする動機と利点（「サル真似」によって得られること）が分かるように六十字以内で説明しなさい。

問四　傍線部③「イモ洗い」とありますが、イモ洗いの例を通して筆者は何を言おうとしているのですか。四十字以内で説明しなさい。

問五　傍線部④「学びの方法が変わ」ったのはなぜですか。その説明としてもっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

（ⅰ）「学びの方法が変われば、教え方も変わらざるを得ない」とありますが、

ア　子どもたちがだれかのようになりたい、未知のことを知りたいという強い欲求を持つようになったから。
イ　子どもたちがおとなが知識を教えてくれないことを知り、信頼も尊敬もしなくなってしまったから。
ウ　子どもたちが過剰な情報によって想像する力を奪われ、サル真似をしなくなってしまったから。
エ　子どもたちがインターネットを開けば、知りたいことがすべて学べると思うようになったから。
オ　子どもたちが人と出会い、実践の場に参加することが学びの本質であることに気づいたから。

（ⅱ）「教え方も変わらざるを得ない」とありますが、筆者はこれからはどのようなことを教えるべきだと考えていますか。本文中の言葉を用いて二十五字以内で説明しなさい。

問六　傍線部⑤「他者のなかに自分を見つける楽しさ」とありますが、ここでの「楽しさ」の説明としてもっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア　何かを教えると自分が損をすると考えるサルと違い、人間は他者に教えることによって優越感をもてること。
イ　生まれた能力によって環境に適合するサルと違い、人間は他者からの教育によって成熟した大人になれること。
ウ　簡単に仲間の行動を真似ることのできないサルと違い、人間は他者から学ぶことで豊かな関係性を築けること。
エ　前文化的な行動にとどまるサルと違い、人間は他者の知識を情報として広めることで文化的生活を送れること。
オ　仲間の動作に同調する高い能力を持つサルと違い、人間は他者とは違う行動をすることで喜びを感じられること。

問七　本文の説明として適当なものにはA、不適当なものにはBを、それぞれ解答欄に答えなさい。

ア　文末に断定的な表現を用いることで人間のあるべき姿を強く訴えている。

イ　他の動物と比較しながら人間だけが持つ特徴を分かりやすく伝えている。

ウ　「サル真似」という言葉の正しい使い方を例を挙げながら説明している。

エ　「おせっかい」というキーワードを用いて学びの大切さを強調している。

オ　現代社会の特徴を踏まえて実践する力や考える力の重要性を説いている。

三

次の①～⑤の傍線部のカタカナを漢字に改めなさい。

① 九州や沖縄はオンダンな気候の地域だ。

② 早寝早起きでキリツ正しく生活している。

③ 首相の視察を警察官がゴエイする。

④ うどんやパスタの原料はコムギコだ。

⑤ 大雨が降ったので試合の予定がノびる。

〔国語〕

解答用紙

注意　字数制限の問題では、句読点も一字として数えます。

一

問一
- X
- Y
- Z

問二
- A
- B

問三

問四

問五
- i
- ii

問六

問七
- ア
- イ
- ウ
- エ
- オ

二

問一

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

①
②
③
④
⑤
びる

受験番号		フリガナ	
		氏名	

得点	

国語　解答用紙

注意　字数制限の問題では、句読点も一字として数えます。

一

- 問一　X ウ　Y イ
- 問二　A イ　B オ
- 問三　エ
- 問四　ウ
- 問五　康太のタイムは速いというデータが出ているにも関わらず、いつまでも自信がなく決断できずにいる康太の様子を見てもどかしく思い、いら立ちを感じている。
- 問六　ア
- 問七　エ
- 問八　自分が、すばらしい仲間たちに囲まれて信頼されていることを実感してうれしく思い、駅伝をがんばらなくてはならないと決意している。
- 問九　イ

二

- 問一　X オ　Y イ　Z ア
- 問二　ア
- 問三　他者に対する強いあこがれや未知のことに対する好奇心を抱くことで、今までにはなかった知識や経験を我がものとすること。
- 問四　サルは人間のようにそっくりそのまま仲間の行為を真似することとはできないということ。
- 問五　i エ　ii 実践すると考える力を教えるべきだと考えている。
- 問六　ウ
- 問七　ア B　イ A　ウ B　エ B　オ A

三

- ① 温暖
- ② 規律
- ③ 護衛
- ④ 小麦粉
- ⑤ 延（びる）

受験番号		フリガナ	
		氏名	

得点	